

東ニテ若君家光徳川 御誕生ニヨリ、然ルベキ御乳母ヲ京都ニオヒテ求メラル、ニ、ミナ人關東ヲ
オソレテ、誰モ召ニ應ズルモノナキユヘ、粟田口ニ札ヲタテ、尋子モトメラル、コトヲ聞テ、此女
上京シテ、板倉伊賀守勝重ニ寄テ、我等ガゴトキ賤シキモノニテモ宜シク候ハ、關東ヘ罷下ル
ベシトイフ、勝重モ俗性トイヒ、夫ト云、何レモ武名高ヲ以テ許諾セラレ、速カニ關東ヘ下シ、其後
佐渡守正成ヲ召出サレント有シニ、妻ノ脚布ニ包マレテ出ル様ナル士ニテハ無迎御受申サズ、
其上存寄有連、其妻ヲ離別シケル、然レドモ彼ガ産タル子ナレバ、此ハ其方ヘ與フル也トテ、稻葉
丹後守兄弟ヲバ關東ヘ送リケル、先年正成ガ家ヘ盜賊入シ時ニ、此妻出合テ盜賊二人ヲ斬殺シ、
殘盜ヲ追拂ヒタリシ、其刀ハ紀ノ正恒ニテ、今ニ稻葉備前守正員ノ家ニ傳フト云リ、○下略

〔蟹の燒藻下〕當御代は、男女の御子、腹々に數多出來させ賜ひければ、御留守居衆御乳母に事欠て、
様々に求め集められたりけり、むかしよりいかなる故にや、御乳を奉る者は、御目見以下の妻御
與力同心、其外小給の御家人の妻をのみ用ひられけるが、引續て御誕生多かりければ、こと足らぬまゝに、大御番
小十人の面々の妻も、相應の乳持たらんは、御用ひ有べき由にて求められたり、

御乳母のあつかひ方、朝夕の食事は、御上りの通りにて美味なれども、自ら冷になりて、煮立の
様にはあらず、まかも御臺所に於て、御廣舗番頭同添番など立合て喰すること故、少しも能
育たる者にて、前後をたしなむ心の女は、快く食することはなし、其上部屋にても、湯茶を己が
儘に吞こともならず、御茶屋へ行て目付立合て吞ことなる由、藥とても同じことなれば、中々
氣血のめぐりて、乳をよくたもつことあたはずなり、去により、小給の者の妻など、まかるす
べをも何とも思はず、辨へなきそだちならざれば、まばしも乳もたもつことあたはず、夫さへ
小給の身にて、己が生たる子は里にやりて、御乳に出るに、君の御爲冥加とは云ながら、わづか
三四ヶ月の中に己が乳をば失ひて、其間は夫も家事の扱ひに差つかへ、又下りては、里にやり